九時まで待って

田辺聖子

田辺聖子

九時まで待って

集英社

九時まで待って
1988年1月25日第1刷発行

●

著者／田辺聖子(たなべ せいこ)
発行者／堀内末男
発行所／株式会社集英社
101東京都千代田区一ツ橋2—5—10
☎03-230-6100(出版部)230-6171(販売部)230-6080(製作課)
印刷所／凸版印刷株式会社
定価／980円
©S.TANABE Printed in Japan 1988
ISBN4-08-772631-2 C0093
日本音楽著作権協会(出)許諾番号第8747154-701号

●
検印廃止
乱丁、落丁本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取替え致します。
本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

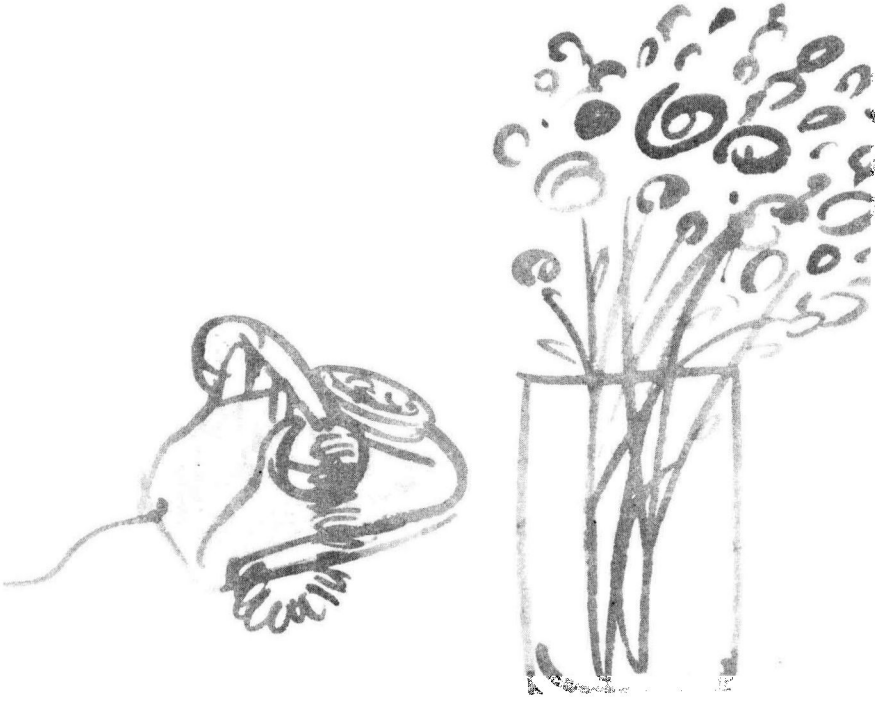
九時まで待って

目次

TŌKYO	KŌBE	ŌSAKA
夏の虹	春の嵐	氷雨
85	47	7

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

NEW YORK	KYŌTO
粉	野
雪	分
203	137



装幀
装画
川村みづえ

九時まで待って

OSAKA 氷雨

1

一日じゅう、稀は電卓を手にして、お金銭の計算をしていた。各誌の締切があるので（中にはもう過ぎているのもある！）朝から電話は狂ったように鳴りつづけていた。はじめは私も律儀にいちいちとりあげ、

「はい。……そう申し伝えます。はい、わかりました」

と受けこたえし、切ってから稀に、

「『ジュリア』のエッセー。いつになりますかって」

「『猫のデデ』、お願いしますって。ひたすら、お願いしますって。赤ランプが点滅してますって冗談いうてはった。でも、声が引き攣ってたわよ」

などと報告していた。『猫のデデ』というのは稀が連載している小説のタイトルである。べつに猫が主人公なのではなく、猫のような女で、アダナをデデというのがヒロインである。

「じゃかッし！　ぐだぐだぬかすな！」

稀は吠えた。仕事がたてこみ、遅れるとイライラするので、そんな風にどなることはあるが、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それでも仕事のイライラだけだったら、もう少しはご機嫌がいいはず。何たって、こうも、〈仕事の洪水に押し流されてる〉

というのは稀の優越感をくすぐるからなのだ。

三年前、稀はある文学賞の新人賞をもらった。それから頓に仕事がふえた。一つ二つはテレビドラマ化されて評判もよかったから、今まで来なかったような、ポピュラーな雑誌からの注文もふえたのである。稀がもらった新人賞のそれは、純文学関係であるが、稀はそれを機会に、違うジャンルの小説も書きはじめ、それはかなり現代の穴場だったらしくて、当ったというべきであろう。私が読んでも、文章に一種の「太刀風」というような鋭さがあって、それでいて面白かった。世間もそう思ったのかもしれない。はじめて週刊誌の連載の話が来て、稀はギャアギャアとわめいて喜び、（稀は三十二だが、ウチウチの、私に対した時はコドモみたいになる）ありったけの力を集中して書いた。新聞社系のぱっとしない週刊誌なので、連載中は話題にならなかったが、その新聞社から一冊にまとまって刊行されると、またもや、かなり売れたのである。

稀はテレビ出演も乞われるようになった。若く見られるほうで、二十七、八ぐらいに人には思われている。大学を出て三、四年はサラリーマン暮らしをしていたので、それがいまも身についていて、髪も短く刈り、夏でも白いスーツにネクタイをきっちりつけてテレビに出たりする。稀はいまは作家と呼ばれているが、ほんとうはそれが嬉しくてならないのに、（作家にな

りたくて仕方なかったくせに）

「作家なんていややな」

というのである。

テレビ出演をいわれると、

「テレビなんかへ出て、顔、おぼえられとうない」

といいながら、内心は嬉々として出ている。テレビ出演用に、スーツをいっぺんに三着作ったりする。金廻りがよくなったのが自分でもこたえられない快感らしい。

（オダ・レンかて、こない儲けてへんやろな、ミッチイ）

と上機嫌で私にいう。私のことを蜜子とよばないでミッチイという時は上機嫌な証拠である。

（トミタ・ジュンかてそや。あいつも霞（かす）んでしもた）

オダもトミタ・ジュンも、稀と同じようなころにデビューした若手の作家であるが、そのあと、一、二作書いて沈黙している。どちらも本業を持っていて、小説で食べているというのではないようであった。

彼らにくらべると、大衆受け、というより女性受けする小説を書くようになった稀は、しこたま有名になった。（しこたま有名になるっていいかた、いけないかしら？　稀は私の言葉づかいがヘンだと嗤（わら）うが、そのあと彼の書く小説に、その通りの言葉がでてくることがある）女性読者に人気があるみたい——眉が濃くて甘さの漂うルックスで、長身の稀は、女の子のファ

ッション誌に写真がよく載るようになった。
彼はそれもいやがっていない。
自分の写真を丹念に自分でえらぶ。
（これにして下さい……いや、そっちはダメ――うーん、いや、これがまだマシかな）
などとこまかく指図し、雑誌が送られてくると、自分の写真に飽かず見入り、その上の「浅野　稀」という字についても、
（もっと大きいほうがよかったナ）
と文句をいったりするのだった。自分の名前が好き、というより、名前が新聞や雑誌や週刊誌に出るのが大好きみたい。浅野稀というのは本名である。少し前、女性誌「ジュリア」に稀の特集が載ったが、このときなんか大変だった。締切でがんじがらめの日程をやりくりして稀はまる三日、撮影につきあい、私もずうっと付き人みたいに付き添わなければならなかった。写真ができあがると稀はレイアウトにまで注文を出した。
〈週末、浅野稀する〉
という文句も、稀自身が指定したのである。
夕暮の道頓堀でたたずんでいる稀の写真の横に、二、三行、これも稀の書いたもの。
〈僕の好きなもの――冬の黄昏。孤悲（こひ）という、恋のあて字。老朽した山波。付け睫毛（まつげ）の片方が

落ちてる朝のベッド――ぼく自身〉

稀は、自分自身を綺麗な包装紙で包み、リボンをかけてシールを貼って売り出すのが大好きで、またその才能もあった。そして、

（オダ・レンなんて、あいつら、それがでけへんから、あかんのじゃわ）

なんて、吉本興業的大阪弁をわざと偽悪的に使って喜んでるのだった。稀は日常でもそんな言葉を愛用する。「じゃかッし」というのは、「やかましい」を下品に崩した大阪弁である。甘い美貌の稀がいうと、吉本興業弁も愛嬌に聞えるので、一緒に暮らしはじめた当座、それは私を大いに楽しませたものだった。稀はごく中流の生れ育ちなので、本来、ガラは悪くなかったが、面白がって品の悪いコトバを使っているうちに、今では日常自然に出てくるようになった。――尤も、テレビではイントネーションに上方弁をとどめながら、言葉は完全な標準語を使う。

稀は自分演出の臭さを自分で知っていて、

（まあ、今はキザらせてもらいまひょか）

なんていっている。そうして、

（こういうカンが、トミタ・ジュンにはないねんからアホじゃ、あいつは）

という。稀の人生はただいま、他の同年齢作家と比較して優越気分に浸ることで成り立って

いるのである。私は全面的に稀に賛同しているわけではない。私自身は富田純のゴツゴツした私小説をきらいではないし、（進んで買って読もうという気にはならないが）小田廉の率直で簡潔な文章の小説も悪くはないと思っていた。けれども、稀のその言い方が面白かった。

そう、ただいま私にとって、稀は、面白くってならないのである。

とっても気が合う――（と、稀も、私のこと思ってるに違いないと思う）。

この間の「週末、浅野稀する」の「ジュリア」の撮影の時でもそうだ。稀は絶えず鏡を見たがった。寒風に吹かれる橋のたもとの撮影なので、髪が乱れたり、シャツの裾が煽られたり、するのだった。私はそのたび、さりげなく稀に近寄って手を出し、ついでに、てのひらに入るような小さい鏡を稀に見せて一べつさせるのだった。稀は手首にプラチナのチェーンを巻いている。それを、それとなく袖口からちらと見せるように気をつけたり、マフラーの巻きかたを示唆したりする、そういう作業を稀は誰とやるよりも、私と共同でやりたがった。

稀の担当編集者は、稀より若い男性なので、こういうとき、ボーと見ていて、あまり役に立たない。作家の撮影には、スタイリストもついてこない。

稀は私のてのひらの中の鏡を身をかがめて覗き、安心するのだった。写真のうつされかたというのを早い時点で会得したので、稀は写真うつりがいい、といわれているが、これも稀のいう「カン」である。私は稀のそんな、カンのよさにも面白がらされている。

盛り場のどまん中だったので、

（浅野稀やわ……）
（サインして）
と女の子たちが手帖を拡げたりして、やってくる。それを押しとどめるのは編集者の役目で、私はカメラマンの横で、スタッフの一員のような顔をして、知らんふりでいた。でも稀が、（キャッ、稀やわ）（誰やて？）（ほら、浅野稀）と通りがかりの女の子たちにいわれるのを、満更不快な気分でいるのではないことが、よくわかるのだった。彼女たちはしかし、稀の小説やエッセーを読んでいないかもしれない。テレビに出るために、顔を知られているのだろう。
その日は、カメラマンと編集者は、すぐさま東京へ帰るというので、あと夕食を食べにいったのは、稀と私と二人きりだった。仕事はあったのに、稀はまだ昂揚感が持続していて、街の華やぎの中に、身をおいていたいらしかった。
道頓堀川のそばの地階のバーで、カンパリソーダを飲む。飲みながら、
（今月、まだ二つあったな？）
と彼はいい、これは仕事の予定である。
（三つ。「チェック」の短篇、忘れてるんやない？）
と私は稀のスケジュールは諳（そら）んじている。それに稀のクセも。
なぜか、一ぺん忘れると、ずうっと忘れつづけるというクセが、彼にはある。
（あーッ、そうか、また「チェック」か、もうそんな時分か、うんざりさせよンな）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com